

第八回 諸橋轍次記念 漢字文化理解力検定 解答・解説

【問題Ⅰ】（小計45点）

問1【読み書き】①Ⅱ述懐 ②Ⅱ寸陰

③Ⅱせこてんぺん *「せいこてんぺん」も〇とする ④Ⅱひつきよう

⑤Ⅱ流転 ⑥Ⅱ諸侯 ⑦Ⅱ災厄 ⑧Ⅱいちる ⑨Ⅱちようじよくとくそう

⑩Ⅱ寓（各2点）

問2【音訓】ア（2点）

問3【名句】ウ（2点）

問4【熟語】イ（2点）

問5【熟語】エ（2点）

問6【慣用句】イ（2点）

問7【諸子百家】イ（2点）

問8【故事成語】ア（2点）

問9【部首】ころも *「ころもへん」も〇とする（3点）

問10【諸子百家】ウ・カ（3点 完答）

問11【部首】ア（3点）

問12【故事成語】エ（2点）

■解説 問1 ①「述懐」は、心中の思いを述べること。「述懐（懐ひを述べ）」と訓読できる。②「寸陰」は、わずかな時間。「寸」は、少しの、ちよつとしたの意。「陰」は、光陰で、時間の意。③「世故」は、世の中の事柄、俗事。古くは「せいこ」とも読んだ。④「畢竟」は、つまり、要するに、結局の意。「畢」も「竟」も終わるの意。⑤「流転」は、同じ状態にとどまらず、変化していくこと。仏語なので、吳音で「る」と読む。⑥「諸侯」は、古代中国で、天子から封土を受け、その封土内の人民を支配していた人。「侯」を「候」と誤記しやすい。「侯」は、君主の意。「候」は、うかがう、待つ、兆し、時節などの意。⑦「災厄」は、「災」も「厄」もわざわいの意。⑧「一縷」は、一本

問6 「席暖まる暇もなく」は、韓愈「争臣論」の「孔席不暇暖（孔席暖まるに暇あらず）」をふまえたもの。非常に多忙であることをいう。

問7 孔子（前五五一―前四七九）は、春秋時代の魯の人。周王朝（前一〇五〇?―前二五六）はその支配力が次第に弱まり、權威を回復するために都を東に移した（周の東遷）。東遷以前の約三〇〇年間を西周、以後の約五〇〇年間を東周と呼ぶ。また、周の東遷から秦の建国（前二二一）までを春秋時代（前七七〇―前四〇三）・戦国時代（前四〇三―前二二一）とする。春秋時代は、孔子が編纂した歴史書『春秋』に記されている年代にほぼ相当するので、この名が起こった。戦国時代は、乱世が続いていたから、あるいは劉向の『戦国策』に記されている時期であることから、この名が生じたという。

問8 ア「喪家の狗」は、不幸があった家の、えさも与えられず瘦せ衰えた犬。転じて、見るかげもなく落ちぶれた人のたとえ。「喪狗」ともいう（史記、孔子世家）。イ「虎の威を仮る狐」は、狐が虎の威勢を借りて他をおどかしたことから、弱い者が権力のある者の威勢をかさにきていばること（戦国策、楚）。ウ「汗血の馬」は、昔、中央アジアに産する名馬が血のような汗を流し、一日に千里を走ったということに基づく。汗血馬。エ「釜中の魚」は、釜の中で煮られようとしている魚。死が目前に迫る境遇にあるたとえ。「釜魚」ともいう（資治通鑑）。

問9 裡は、衣がネに変化したもので、裏と同字。表・哀・衰・褒・袋・装・裂・裁・初・袖・裕などは、いずれも部首が衣。衣は表の下部のように省略されることがある。また、ネの形になって衣偏と呼ばれることもある。このうち哀・衰・褒は部首を「」（なべふた）と誤解しやすい。

問10 ア「庭の訓え」は、孔子の息子鯉（字は伯魚）が庭を通った時、孔子が呼び止めて、詩や礼を学ぶように教えたという故事。庭訓（論語、季子）。イ「孔孟の教え」は、孔子と孟子が説いた教え。儒教。ウ「三遷の教え」は、孟子の母が、息子の教育のために何度も住居を移したという故事。孟母三遷（列女伝、母儀）。エ「覆車の戒め」は、「前車の覆るは後車の戒め」から、前人の失敗を見て自分の戒めとすること（晋書、庾純伝）。オ「履霜の戒め」は、「霜を履んで堅氷に至る」から、前兆を見たら、やがてくる災害に対して予め

の糸すじ。転じて、わずかにつながっているさまをいう。⑨「寵辱」は、時めくことと恥の多いこと。名声と恥辱。「得喪」は、得ることと失うこと。⑩「寓」は、やどすの意。「寓意」は、他の物事にかこつけて、それとなくばかして述べること。

問2 熟語は一般に、音だけ、または訓だけで読むが、主に日本で作られた熟語では、音と訓を混用して読まれることがある。このうち、「湯桶」のように訓＋音（ゆ〔訓〕・トウ〔音〕）で読む読み方を湯桶読み、「重箱」のように音＋訓（ジュウ〔音〕・はこ〔訓〕）で読む読み方を重箱読みと呼ぶ。ア「夕刊」は訓＋音、イ「座敷」は音＋訓、ウ「仕事」は音＋訓、エ「台所」は音＋訓である。ウ「仕事」の「シ」は、サ変動詞「す（する）」の連用形「し」に漢字を宛てたもので、「つかえる」の意はない。「仕種（仕草）」「仕舞」なども同様。問3 ア「月満つれば則ち虧く」は、満月になると必ずかける。物事には必ず盛衰があるということ。イ「月明らかに星稀なり」は、月光が明るくて、星がまばらにしか見えない。賢人が出て、小人のかがげが薄くなることのたとえ。三国時代、魏の曹操が、蜀の劉備の逃走をそしった詩から。ウ「光陰箭の如し」は、時間の経過は矢が飛ぶように速く、二度と帰らないということ。エ「光陰は百代の過客なり」は、李白の文章の一節で、月日は過去から未来へと、永遠の旅をする旅人のようなものだ、の意。

問4 「川上」は、川のほとり。「上」は、海や川のそばの意。「江上」「河上」も同意。問題文の直後に「さる川べりに立つて、」とある。「川上の嘆」は、孔子が川のほとりに立ち、水の流れを見て嘆声を発したという故事。

問5 アは「上意を下達す」、イは「上下は一心なり」、ウは「上下の關係」と訓読できるが、どれも互文構造ではない。これに対してエ「上和下睦」は、「上下和睦す」を互文化したものの。「上の者も下の者も、みな和らぎ睦み合う」の意。この語の意味を、「上の者が和らいだ態度で接すると、下の者が睦む」と解釈するのは、誤り。なお、次の段落の「濟世救民」も互文構造。

用心せよという戒め（易経、坤）。カ「断機の戒め」は、孟子が他郷から学業半ばで帰った時、機織りをしていた母が織りかけの機の織物を断ち切って、学問を途中で止めるのはこのようなものだと言ったという故事。孟母断機（列女伝、母儀）。問11 耳を部首とするものに、聲（声の旧字）・聾・聵・聾・聵・聵・聵などがある。聡・聰・職などは、位置の違いにより耳偏と呼ぶこともある。

問12 「至誠にして動かざる者無し」は、二重否定の形。二重否定の形は、一般に強い肯定の意味を表す。「至誠」は、この上ない誠の心。「者」は人ではなく、「こと」の意。『孟子』離婁上に「至誠にして動かざる者は、未だ之れ有らざるなり。」とあるのに基づく。（塚田勝郎）

【問題Ⅱ】（小計20点）

問1【誤字訂正】①Ⅱ汁↓渋 ②Ⅱ陰↓影 ③Ⅱ紛↓粉（各2点）

問2【二字熟語の読み方】①Ⅱア ②Ⅱイ ③Ⅱエ（各2点）

問3【四字熟語の意味】イ（2点）

問4【論語の名言】ウ（2点）

問5【漢籍の知識】イ（2点）

問6【万葉仮名】①Ⅱエ ②Ⅱイ（各1点）

■解説 問1 ①「苦汁」は「苦い汁」という意味で、「苦汁をなめる」「苦汁を飲む」などの慣用句で使われる。「クジュウの決断」の場合は、「苦くて渋い」という意味の「苦渋」を用いる。②「陰」は、「光が届かない場所」。ここでの「ひとかげ」は「人の姿」という意味なので、「目に見える姿」という意味ももつ「影」を用いる。③「粉飾決算」とは、実際よりも財務状況が良いように見せること。「粉飾」は、本来は「化粧して飾る」という意味で、「粉」は「おしろい（白粉）」を指す。「紛」は、「まぎ（らわしい）」と訓読みする漢字。

問2 ①「柄」は、音読み「へい」、訓読み「がら」。ア「役柄（やくがら）」の「役（やく）」は音読みなので、これが重箱読み。イ「家柄（いえがら）」の

「家（いえ）」は訓読み。ウ「竊柄（しまがら）」の「竊（しま）」も訓読み。エ「話柄」は、「わへい」と音読みする熟語。②ア「零落（れいらく）」は「落ちぶれる」こと。イ「奈落（ならく）」は、古代インドのことばで「地獄」を意味する「ナラカ（narak）」に対する当て字。ウ「洒落（しやれ・しやらく）」は、「さつぱりしている」ようす、「垢抜けている」ようす。エ「群落（ぐんらく）」は、「植物がむらがつて生えているところ」。③ア「便宜」には「べんぎ」「びんぎ」の二種類の読み方があるが、どちらも二文字とも音読み。イ「工場」には「こうじょう」「こうば」の二種類の読み方があるが、「こうじょう」は二文字とも音読みで、「こうば」は「場（ば）」だけ訓読み。ウ「平地」には「へいち」「ひらち」の二種類の読み方があるが、「へいち」は二文字とも音読みで、「ひらち」は「平（ひら）」だけ訓読み。エ「音色」には「おんしよく」「ねいろ」の二種類の読み方があり、「おんしよく」は二文字とも音読み、「ねいろ」は二文字とも訓読み。

問3 示された四字熟語の空欄を埋めると、「弱肉強食」「徹頭徹尾」「鶏鳴狗盗」「多岐亡羊」。「肉」「頭」「狗」「羊」を並べ換えてできる四字熟語は「羊頭狗肉」で、その意味はイ。なお、アは「竜頭蛇尾」の意味、ウは「画虎類狗」の意味、エは「大言壮語」の意味。

問4 アの「君子」、イの親への「孝」、エの「仁」は、いずれも『論語』に特徴的な考えを表すキーワード。それに対して、ウは、「柔らかに弱いものが堅くて強いものに勝つ」という意味で、こういうふうに着識（弱い者は強い者には負ける）とは逆のことをいうのは、『老子』の特色の一つ。

問5 イの『唐詩選』はすぐれた唐詩を集めた書物だが、編纂されたのは唐王朝の時代ではなく、清王朝の時代。他の選択肢には、誤りはない。

問6 ①万葉仮名の「受」に対応するひらがなを答える問題。現在、使われている音読み「じゅ」から、「ず」ではないかと推測できる。②ひらがなの「し」に対応する万葉仮名を答える問題。イ「之」は、音読みでは「し」。ひらがなの「し」は、「之」を縦に長く引き伸ばしたくずし字に由来する。なお、ア「仁」はひらがな「に」の、ウ「州」はひらがな「つ」の元になった漢字。エ「止」は、「と」に対応する万葉仮名として使われる。（円満字二郎）

【問題Ⅳ】（小計15点）

問1【形音義】（1）＝キ （2）＝ウ （3）＝カ （4）＝ア（各3点）

問2【漢字音】ウ（3点）

■解説 問1（1）異体字の中でも、「峯」と「峰」のように、漢字構成要素の位置だけが異なる異体字のことを「動用字」と呼ぶことがある。（2）仮借は、その内容から製字の仮借と用字の仮借に分けられる。問われているのはそのうちの用字の仮借で、これは「通仮」とも呼ばれる。一方の製字の仮借とは、もともと字がなかった言葉について、同じ発音である別の言葉の字形を借りて記す方法。もともと「戈」の意味であった「我」を、「わたし」の意味で用いるのがこれにあたる。（3）新たに作られた字を「今字」、初めに作られた字を「古字」という。「今字」はまた「分化字」や「後起字」とも呼ばれる。（4）漢代に流行した方法で、主にこの方法を用いて意味や語源を解釈する『釈名』（後漢・劉熙）という辞典までが作られた。

問2 呉音のみで読むと「ゴンゴ」。漢音のみで読むと「ゲンギョ」。幕末維新期に「ゲンゴ」と、漢音と呉音とを混ぜて読むようになったと言われる。ア・オは唐音。イは呉音。エは二字ともに漢音で、呉音で読めば「ケリキ」となる。（田中郁也）

【問題Ⅲ】（小計15点）

問1【国字】（1）＝ウ （2点） （2）①＝ア ②＝睥（①2点、②3点）

問2【国訓】（1）＝スシ ＊「すし」も〇とする （2）＝鮓（1）2点、（2）3点

問3【国訓】イ（3点）

■解説 問1（1）この国字（日本で作られた漢字）は、蘭学（オランダ語の書物を通じた西洋学）が発達した江戸時代に、体液を分泌する器官である「セン」を表す形声文字として出現した。造字の意図は、「泉」のように体液が湧きだす器官（肉）ということ、会意性を帯びている。（2）蘭学者の宇田川玄真（榛斎・一七七〇―一八三五）が「腺」の「萃」もった臓器ということで作られた会意性を帯びた形声文字。これらは、漢方医学においては明確に表現されていなかった概念である。

問2 日本食の「すし」（寿司は当て字）のこと。中国では、それぞれの字が塩漬けの魚、魚の塩辛のような食品を意味したが、日本ではともに奈良時代以前から木簡などに、すし（おそらく「なれずし」としての用法が見られる。日本では、すしの製法として押しずしや握りずしなどが派生することで、明らかな国訓（日本で作られた字義）となつて定着していく。今でもこれらの字はすし店、とくに「鮮」は近畿地方のすし店において、しばしば用いられている。

問3 「火事」は、日本では古く「ひのこと」と読まれる和語。変体漢文などで漢字表記され、次第にそれが音読みされるようになって、音読みの熟語として定着したもの。同様に「返事」ももとは「かえりごと」と読む和語で、そこから和製漢語（日本で作られた漢語）となったもの。国字・国訓の類として、こうした熟語にも注目したい。（笹原宏之）

【問題Ⅴ】（小計5点）

問1【座右の銘】ア（1点）

問2【業績】イ（1点）

問3【生涯】ウ（1点）

問4【生涯】ア（1点）

問5【業績】オ（1点）

■解説 問1「行不由径」は『論語』『雍也篇』に出てくる語句。

問2 諸橋博士が都留文科大学学長に就任したのは一九六〇年（七十八歳）の時。博士は大東文化大学の前身たる大東文化学院で教鞭をとっていたが、学長には就任していない。

問3 諸橋博士は幼少のころ、母のシヅから聞いた『西遊記』の話に強い印象を受け、生家（記念館敷地内）から見える景勝、八木ヶ鼻を孫悟空の生まれた花果山に見立てて夢想していた。

問4 イ、エは日本で作られた識字教科書。イは「春椿夏は櫻に秋楸、冬は終に同じくは桐」から始まる。エは「山高きが故に貴からず」から始まる。ウは中国の梁・周興嗣の作と伝わるもので、「天地玄黄、宇宙洪荒」から始まる計一千字の韻文である。

問5 アは、文字学者岡井慎吾（一八七二―一九四五）氏の博士論文題目。イは諸橋博士の高弟、鎌田正（一九一一―二〇〇八）氏の博士論文題目。ウは、中国文学者小川環樹（一九一〇―一九三）氏の博士論文題目。エは、中国哲学者赤塚忠（一九一三―一九八三）氏の博士論文題目。（田中郁也）